

2017年度 東京大学 前期 国語

第一問 評論

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★☆☆	55分	伊藤徹『芸術家たちの精神史』(2015)からの出題。 伊藤徹(1957-)は静岡市生まれ。京大文学部哲学科卒業。2017年現在、京大工芸繊維大学教授。著書の『柳宗悦 手としての人間』は東京大学で2004年に出版されている。	例年通り評論文の出題であるが、二行問題が一問減って記述問題が全四問となった。このことにより時間に余裕が生まれた一方で、一問あたりの配点が高くなり、解答の方向性がずれたときの失点が大きくなったので気をつけよう。また、具体例が多いので、読解に時間がかかり過ぎたり筆者の伝えたいことを見失ったりすることを防ぐために、抽象的な説明部分であるのか具体例の部分であるのかを意識しながら読もう。

解答

(一) 科学技術は問題解決のために人間が開発するものだが、科学技術自体が

さらなる問題を生んで新たな技術の開発を人間に強いるという展開が無限に続くということ。(74字)

(二) テクノロジーはある結果をもたらす行為の方法についての知識であり、その結果の是非には関与せずに、人間にその是非の判断を迫っているということ。(69字)

(三) 実践的判断における論理は倫理的基準に基づいているが、その基準を支えているとされる概念は人間の想像力が生んだ虚構であり、論理を基礎づけるものが欠けているといえるから。(82字)

(四) 科学技術は自己展開を続けて不可能だったことを可能にして、倫理的基準を支えてきた従来の虚構を変質させた。こうして、判断の必要が初めて生じた事態に人間を直面させ、新たな虚構の産出を強いて、虚構に支えられている人間の生全体を変容させるということ。(120字)

(五) a 耐性 b 救済 c 余儀

本文解説

用語解説

― 出典：『広辞苑 第六版』(岩波書店) (ただし、※のついた語義は解説執筆者による)

リフレイン ※音楽用語で、曲の中で各節の後に同じ部分を繰り返すこと。

また一般に、繰り返すこと。

牽引 ひくこと。ひきよせること。

テクネー ※テクニクの語源にあたるギリシア語。芸術をも含んで広く技術一般を意味する。

術一般を意味する。

放擲 ほうり出すこと。なげうつこと。なげすてること。うちすてること。

虚構 事実でないことを事実らしく仕組むこと。また、その仕組んだもの。

作りごと。フィクション。

尊大 たかぶって偉そうにすること。横柄。傲慢。

コンセンサス 意見の一致。合意。

摘発 悪事などをあばいて公表すること。

設問解説

(一)

解答 科学技術は問題解決のために人間が開発するものだが、科学技術自体

がさらなる問題を生んで新たな技術の開発を人間に強いるという展

開が無限に続くということ。(74字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 第1段落

解説

第1段落の内容の把握を問う設問である。まず、傍線部冒頭の「科学技術の展開」についての説明は第1段落1文目にあり、「問題を自ら作り出し、それをまた新たな技術の開発により解決しよう」というかたちで自己展開していく」と書かれている。同段落2・3文目に具体例があるので理解の助けにするとよい。つまり、問題解決のための科学技術がさらなる問題を生み、その問題を解決するために新たな技術が必要となり、その技術がまた問題を生む……というふうな技術開発が進んでいくということである。

次に、「人間の営みでありながら」については、第1段落1文目の「与えられた困難を人間の力で解決しよう」として営まれるテクノロジーの「ところを参考にして説明を加える。与えられた困難というのは、ここでは、環境破

壊や感染などの問題のことである。また、「ながら」が逆接であることに注意して、解答にその構造を残せるとよい。後ほど説明するが、人間の営みでありながら人間がコントロールできないところが不気味なのである。

最後に、「有無をいわず人間をどこまでも牽引していく不気味なところがある」については、「有無をいわず」のニュアンスを、第1段落2文目「新たな開発を強いられる」にある、「強いる」という語句を用いて表現する。ここで「人間に強いる」とすると、先ほど述べた、人間の営みなのに人間への強制力をもつという逆接の意味あいを強くできる。「どこまでも」を言い換えるには、第1段落3文目「はたして終わりがあるのだろうか」、同段落4文目「無限に続くとは、たしかに言い切れない」といった表現を使えばよい。

以上より解答は、「科学技術は問題解決のために人間が開発するものだが、科学技術自体がさらなる問題を生んで新たな技術の開発を人間に強いる」という展開が無限に続くということ。」となる。

《解答要素》

- ① 「科学技術（テクノロジー）は問題を人間の力で解決しようとして営まれる」
- ② 「科学技術自体がさらなる問題をもたらし、新たな技術の開発を人間に強いる」
- ③ 「無限に展開する（終わりが無い）」
- ④ 「①なのに②③」

《参照箇所》

- ① 第1段落1文目
- ② 第1段落1・2文目

- ③ 第1段落3文目
④ 第1段落6文目

(二)

解答 テクノロジーはある結果をもたらす行為の方法についての知識であり、その結果の是非には関与せずに、人間にその是非の判断を迫っているということ。(69字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 第5・第6段落

解説

「理由」とあるのに「どういうことか」と問われていることに戸惑うかもしれないが、あまりそのことに悩んで時間を取られずに、とにかく「(テクノロジーが)単なる道具としてニュートラルなものに留まりえない理由」とは何か、ということを考えていきたい。

傍線部を含む文で、「こうして『すべきこと』から離れているところから理由もある。」とあるので、まずは「こうして『すべきこと』から離れているところ」を把握する。これは、第5段落1～3文目に書かれている。1・2文目から、テクノロジーはある結果をもたらす行為の方法についての知識だとわかる。そして3文目から、テクノロジーは行為の結果の是非には関わらないとわかる。なお、「結果の是非」という表現は、第3段落1文目「こうした問題に関わる是非の判断」を参考にしている。

さて、ここ(=テクノロジーはある結果をもたらす行為の方法についての知識であり、行為の結果の是非には関わらないということ)に「テクノロジーが)単なる道具としてニュートラルなものに留まりえない理由」がある

というのだが、どうということだろうか。ここで、傍線部に続く第6段落に目を向ける。この段落では、テクノロジーは実行の可能性を人間に示すだけでなく、人間はかつては実行の可能性がなかったので問われることもなかった問題に、決断せざるをえない行為者として直面することになる、と書かれている。テクノロジーは行為の結果の是非には関わらないので、人間が是非を判断して、その行為をしようか決断しなければならぬということである。テクノロジーは人間が行為をするためのニュートラルな道具に思われたが、以上の説明のように、人間に決断を迫るものでもあるから、単なる道具の役割を超えているといえるのだ。

これらをまとめて、解答は、「テクノロジーはある結果をもたらす行為の方法についての知識であり、その結果の是非には関与せずに、人間にその是非の判断を迫っているということ。」となる。

《解答要素》

- ① 「(テクノロジーは)ある結果をもたらす行為の方法についての知識である」
② 「行為の結果の是非には関わらない」
③ 「人間に是非の判断を迫る」

《参照箇所》

- ① 第5段落1・2文目
② 第5段落3文目
③ 第6段落1文目

(三)

解答 実践的判断における論理は倫理的基準に基づいているが、その基準を

支えているとされる概念は人間の想像力が生んだ虚構であり、論理を基礎づけるものが欠けているといえるから。(82字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型十理由説明型

解答範囲 第9・第10段落

解説

まず傍線部直前に「そういう意味で」という、理由説明を示唆する語句があることに注目する。その指示内容は、「それを基礎づけるものが欠けていること」である。さらにこの「それ」の指示内容は(実践的判断における)「論理」である。「ここまでで、「実践的判断における論理を基礎づけるものが欠けているから。」という、解答の中心が定まる。

それではその論理を基礎づけるものとは何であろうか。傍線部に続く第10段落1文目に、「現世代の化石燃料の消費を将来世代への責任によって制限しようとする論理」と書かれている。「ここで」よって「に注目すると、「将来世代への責任」がこの論理を基礎づけるものであるとわかる。続いて筆者は、「将来世代への責任」は応答の相手(Ⅱ将来世代)がないという点で想像力の産物でしかないこと、「将来世代への責任」の前提となる「人類の存続」が尊大な欲望でしかないことを指摘する。そして同段落3文目で「その他倫理的基準なるものを支えているとされる概念」が「虚構性をもってしている」と書いている。「この「その他」は、「人類の存続」が「倫理的基準なるものを支えているとされる概念」の一つであり、「将来世代への責任」が「倫理的基準」の一つであることを示している。「ここまでで、実践的判断における論理を基礎づけるものは、「将来世代への責任」のような「倫理的基準」であったことがわかる。

以上を先につくった解答の中心につなげる。つまり、実践的判断(Ⅱ現世

代の化石燃料の消費を制限しようとすることなど)における論理を基礎づけるものである倫理的基準(Ⅱ将来世代への責任など)を支えているとされる概念(Ⅱ人類の存続など)は人間の想像力が生んだ虚構であるので、「実践的判断における論理を基礎づけるものが欠けている」といえるのである。よって解答は、「実践的判断における論理は倫理的基準に基づいているが、その基準を支えているとされる概念は人間の想像力が生んだ虚構であり、論理を基礎づけるものが欠けているといえるから。」となる。

《解答要素》

- ① 「実践的判断における論理を基礎づけるものが欠けている」
- ② 「実践的判断における論理を基礎づけているのは倫理的基準である」
- ③ 「倫理的基準は想像力の産物でしかない(想像力に支えられている)」
- ④ 「倫理的基準を支えているとされる概念は虚構性をもってしている」

《参照箇所》

- ① 第9段落2・3文目
- ② 第10段落1～5文目
- ③ 第10段落1文目
- ④ 第10段落3文目

(四)

解答

科学技術は自己展開を続けて不可能だったことを可能にして、倫理的基準を支えてきた従来の虚構を変質させた。こうして、判断の必要が初めて生じた事態に人間を直面させ、新たな虚構の産出を強いて、虚構に支えられている人間の生全体を変容させるということ。(120字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要旨把握型

解答範囲 おもに第9〜第11段落

解説

傍線部を要素に分けて分析する。まず、「人間の生のあり方」とはどういうものか考える。これに「虚構」が関わっていることは最終段落に繰り返し書かれているが、特にわかりやすいのは、3文目の「人間は、虚構とともに生きる、あるいは虚構を紡ぎ出すことによって己れを支えているといってもよい」という部分だろう。ここから、「人間の生のあり方」とは、虚構に支えられて(あるいは、虚構とともに) 生きるというあり方だとわかる。

続いて「その根本」とは何かを考える。指示語の指示内容を押さえると、これは、人間の生のあり方の根本、すなわち虚構に支えられて生きるあり方の根本のことをさしている。つまり、「その根本」は虚構のことを意味しているのだとわかる。

それでは、科学技術は虚構をどのように変えてしまったのだろうか。これは傍線部の前の二文で書かれている。この二文を要約すると、「科学技術は不可能だったことを可能にして、人間を支えてきた従来の虚構を変質させた。この変質によって人間は判断の必要が初めて生じた事態に直面し、新たな虚構の産出を強いられた。」となる。(後半の一部分と同じ内容は第6段落にも書かれている。そこを用いてもよいが、新たな虚構の産出、という要素は抜けないようにしたい。)

以上から解答の中心をつくと、「科学技術は不可能だったことを可能にして従来の虚構を変質させた。それは初めて判断の必要が生じる事態に人間を直面させ、新たな虚構の産出を強いて、虚構に支えられている人間の生全体を変容させるということ。」(98字)となる。さらに字数を考えながら本文全体で把握したことを解答に反映させていく。まず、科学技術が不可能だった

たことを可能にしたのは、自己展開を続けたからである(第1段落より)。

また「虚構」は、ここでは、倫理的基準を支えるときれていた概念のことである(第10段落より)。これは、従来の虚構の変質が、初めて判断の必要が生じる事態に人間を直面させる、という関係を説明するために、ぜひ解答に入りたい要素である。これらを加え、主語が「テクノロジー」であるという傍線部の構造を崩さないように調整すると、解答は、「科学技術は自己展開を続けて不可能だったことを可能にして、倫理的基準を支えてきた従来の虚構を変質させた。こうして、判断の必要が初めて生じた事態に人間を直面させ、新たな虚構の産出を強いて、虚構に支えられている人間の生全体を変容させるということ。」となる。

《解答要素》

- ① 「『人間の生のあり方』は虚構に支えられて生きるあり方である」
- ② 「科学技術の発展が従来の虚構を変質させた」
- ③ 「②は初めて判断の必要が生じる事態に人間を直面させ、新たな虚構の産出を強いた」
- ④ 「科学技術は自己展開を続けて不可能だったことを可能にした」

《参照箇所》

- ① 第11段落2・3文目
- ② 第11段落5文目
- ③ 第11段落4〜6文目
- ④ 第1段落1・2文目
- ⑤ 第10段落3文目

問5

解答 a 耐性 b 救済 c 余儀

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 知識・教養

解説

例年通り、日常的な漢字の書き取り問題である。2015・2016年度に引き続き出題数は三問のみだが、軽視せずに一問も落とさないようにしよう。aのような同音異義語がある語句でのミスをなくすために、必ず見直しをしてほしい。

(千代田麻理、森岡桃子、加藤香織)

2017年度 東京大学 前期 国語

第二問 古文(作り物語)

難易度	★★★★★
所要時間	30分
出典	<p>紫式部『源氏物語』からの出題。構成・心理描写・自然描写に優れ、物語文学の最高峰とされる作品である。</p> <p>本文中で使用された『真木柱』は光源氏三十代後半の頃の話。玉鬘と鬚黒大将の結婚が決まってからの出来事が語られる。</p>
傾向と対策	<p>例年と比較すると、決して量は多くないが、一文一文の長い、難易度の高い文章である。特に、冒頭の二、三文は人物名もなく抽象的な記述が続くので、読み進めるのが困難であった。</p> <p>しかし、前書きにある「光源氏が結婚後の玉鬘に手紙を贈る場面」が始まる第5行以降は比較的読みやすい。設問の大半もこの読みやすい箇所にかかわるものなので、手も足も出ない問題はないはずである。本文中詠まれる二つの和歌も、表現技巧・内容ともに解釈に困るものではない。したがって、冒頭数行が設問の核心にかかわらないことを見抜き、読み飛ばす判断ができれば、配点の期待される設問に十分時間を割ける。</p>

傾向と対策

東大入試では長い間源氏物語が出題されていなかったが、2015年度のセンター試験で問われたこともあり、対策の必要性を理解していた受験生も多いだろう。原文を読み通すのは骨が折れるが、翻案・要約した漫画なども出版されている。目を通しておくとよい。

単に本文を訳して解くのではなく、現代文を解くように、場面の主題を見極めて、心情や背景に気を配りながら深く読んでいこう。

《この解説の使い方》

本文読解

「本文を読み始める前に」と「通読」からなる。古文の実力のある人が実際に本文を読むとき何を考えているか（「本文を読み始める前に」および「通読」の◎部分）や設問解説では述べられなかった重要なポイントなど（「通読」の★部分）について書いてある。どこに注意して本文を読めばいいかわからない人、本文を読むのに時間を使い過ぎる人は、この項目を見てみよう。

設問解説

設問ごとの詳細な解説を、古文が苦手な人にも思考の流れが十分に伝わるように書いてある。古文が苦手な人はまずは「合格答案」レベルの解答を、得意な人は「満点答案」を目指そう。

本文解説

「現代語訳」と「用語解説」からなる。「現代語訳」は基本的に受験生レベルの古文知識でつくられる簡単な訳になっている。ほかの項目を読み終えたあとの復習に使おう。

解答

- (一) ア いいかげんなものではないけれども
イ どうして申し上げることができるだろうか、いや、できない。
オ あなたを懐かしまないことがあるのか、いや、懐かしく思う。
- (二) 玉鬘の、もう源氏と会えないであろうことを悲しむ気持ち。
- (三) 右近が、玉鬘と光源氏の関係について、理解しがたいと疑問に思っている。
- (四) 玉鬘が、光源氏への手紙の返事をあえて礼儀正しく丁寧に書いた。
- (五) 障害があっても相手の女性に強く想いを寄せ続ける好色な人。

本文読解

本文を読み始める前に

前書きと「注」の記述をもとに人物関係を整理しておく。古文が苦手な人は、親子や夫婦の関係に加え、誰が誰にどのような感情を抱いているか(今回の場合、光源氏から玉鬘への好意、それに対する玉鬘の困惑)もあわせて整理しておくとうい。

本文は「光源氏が結婚後の玉鬘に手紙を贈る場面」とある。源氏と玉鬘、鬘黒の関係を踏まえれば、源氏が贈る手紙の内容を予想して本文を読み始められる。

通読

第1段落第1行〜第2行「二月にもなつたまふ。」

★重要だが盲点になりやすい単語が多く、漠然として読みづらい箇所である。

「注」も参考にして要点を把握しよう。

◎源氏が「恋しう思ひ出でられたまふ」のは玉鬘に対してであろうから、「妬さ」は玉鬘を連れて行った鬘黒大将に対しての気持ちだろう。

第1段落第2行〜第3行「宿世などくえたまふ。」

◎「宿世」は「前世からの縁・運命」、「おろかなり」は「並一通りだ」という意味なので、傍線部Aは問題なく訳せそうだ。

◎光源氏が、幻影が見えてしまうほど玉鬘のことを想っているという内容が読み取れる。

第1段落第3行〜第4行「大将の、をくたまふを、」

★前書きに「無粋な鬘黒大将」とあったのを覚えていれば、「をかしやかにわららかなる気もなき人」は「大将」の言い換えであることに気づきやすい。「の」は同格の「の」である。

◎大将に「添ひあたらむ」のは結婚相手の玉鬘。接続助詞「に」で主語が変わり、光源氏が玉鬘に戯れ言を言うのも我慢している、という流れでよさそう。

第1段落第4行〜第6行「雨いたう降りたまふ。」

★前書きから、「光源氏が結婚後の玉鬘に手紙を贈る」ことはわかっているのに、「御文奉りたまふ」のは光源氏だと楽に判断できる。

第1段落第6行〜第7行「右近がもとくありける。」

◎源氏が右近を介して手紙を贈ったという内容は読み取れるが、ほかの箇所は抽象的で読みにくい。ひとまず読み流すことにする。

★読みづらい箇所である。「かつは思はむ」とを思すに「は特に難解なので、

本番であれば読み飛ばしてしまってもよいかもしれない。「一方では右近が思うようなことを思う」という意味になる。源氏は右近が「不審にあやしく」思うことを懸念して、「何ごともえつづけたまはで、ただ思はせたることども」を書くという流れになっているが、読み取れずとも問題のない一文である。

第1段落第8行～第9行「かきたれくなどあり。」

◎光源氏から玉鬘への手紙の内容だ。設問にかかわらない和歌は、下の句「主題が読み取ればよしとしよう。「かきたれて」の和歌の場合、主題は「人をしのぶや」＝「私のことを懐かしく思い出すか」という玉鬘への問いかけだろう。傍線部イは文脈を踏まえずとも訳せそうだ。

★「かきたれて」の歌が問いかけの形をとっている以上、玉鬘からの返歌があること、さらにその返歌の主題が「源氏のことを懐かしむ／懐かしまない」という内容になることが予想できるとよい。今回の場合、傍線部オの解釈でこの予想が効いてくる。

第2段落第1行～第2行「隙に忍びてはれなり。」

◎傍線部ウが近いので、きちんと主語を追うことにしよう。右近が手紙を見せると、「ば」で主語変化（玉鬘が「うち泣き」、「御さま」を「思ひ出でられたまふ」が、光源氏は、「いかで見たてまつらむ」とは言えない親なので、「げに、いかでかは対面もあらむとあはれ」に思われる、という流れのようだ。これを踏まえて(二)を解く。

第2段落第2行～第4行「時々むつかく色見けり。」

◎非常に読みづらいが、(三)で問われている傍線部エの解釈にかかわるので、

時間をかけて考えることにする（詳しい説明は設問解説参照）。

第2段落第4行～第5行「いかなりけきたまふ。」

◎「今に心得がたく思ひける」のは玉鬘か、右近か。丁寧に考える必要がある。

◎源氏の手紙に「御返り」を書くのは当然玉鬘だろう。

第2段落第6行～第7行「ながめすくたまへり。」

◎玉鬘から光源氏への返事の内容だ。傍線部オが含まれるので、和歌は丁寧に読むことにする。

第3段落第1行「ひきひろげくたまへど。」

◎「ひきひろげ」以降の主語は手紙を受け取った光源氏だろう。

◎「玉水」は涙を喩えたものだろうか。涙を見られてはきまりがわるいので平然と振る舞った、という流れでよさそう。

第3段落第1行～第3行「胸に満つ心なりける。」

◎以前愛した「尚侍の君」＝朧月夜に対し、「これ」は玉鬘のことを、「かの昔」に対して、「さし当たりたること」は今直面していること＝玉鬘への懸想を指す、という形で、玉鬘への懸想が強調されている箇所だろう。

第3段落第3行～第5行「好いたる人くれたまふ。」

◎「好いたる人々つまなりや」が源氏の独白となっているようだ。「さましむびたまひて」「爪音思ひ出でられたまふ」とあるから、心を静められず、玉鬘への想いを断ち切れないうる様子の描写だろう。

◎「好いたる人」は直訳すれば「色好みな人」だが、これだけでは解答欄が大きく余る。(五)はじっくり解く必要があるだろう。

★「似げなき恋のつま」や「爪音」の主は玉鬘であるが、そこまで読み取れなくても、光源氏が想いを断ち切れずに悩んでいる様子がわかる。

設問解説

(一)

解答

《合格答案》

ア 並一通りではないものであるけれど

イ どうして申し上げることができるだろうか、いや、できない。

オ あなたを懐かしまないことがあるうか、いや、懐かしく思う。

《満点答案》

ア いいかげんなものではないけれども

イ どうして申し上げることができるだろうか、いや、できない。

オ あなたを懐かしまないことがあるうか、いや、懐かしく思う。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 現代語訳

解説

アは訳語の選択が少し難しいが、イ・ウは《合格答案》と《満点答案》に差がつかないほどやさしい問である。

ア

形容動詞「おろかなり」は「①おろそかだ・並一通りだ②愚かだ」を意味する重要単語で、特に「おろかなり」の形で①の否定「並一通りでない」

の意を表すことが多い。これだけの知識で《合格答案》は導ける。

「宿世」などいふもの『おろかなり』は複数の「並一通りの宿世」と比較されるように、この「おろかなり」は複数の「並一通りの宿世」と比較されるような「並一通りでない宿世」について述べたものではなく、単に「宿世」一般の性質について述べたものだと考えるのが自然である。この点を踏まえれば、「並一通りのものではない」という比較対象を連想させる表現ではなく、よりふさわしい「いいかげんなものではない」という訳語をあてることができると。「宿世」は「前世からの縁・運命」を意味する重要単語なので必ずおさえておく。

イ

傍線部を品詞分解すると、「いかで/かは/聞こゆ/へ/から/む」となる。副詞「いかで」には「①どうして②どうにかして」の二つの意味があり、どちらの意味もよく問われる。傍線部では「どうして」の意味をとるのだが、その判断の決め手となるのが直後の係助詞「かは」である。係助詞「か」「か」はともに疑問・反語の意を表す。「か」についてはどちらの意味をとるか文脈から判断しなければならないが、「かは」の方は基本的に反語の意味で用いられるので悩む必要はない。

「聞こゆ」は謙讓語本動詞で「申し上げる」の意。主語は手紙を書いた源氏、目的語は直前の「恨めしう思ひ出でざる」と「へ」である。「へから」は助動詞「べし」の未然形、「む」は助動詞「む」の連体形で、ここでは前者を当然や可能、後者を推量で訳するのが自然である。「聞こゆ」が一人称主語なので「む」は意志として訳したいところだが、今回は難しい。

オ

傍線部を品詞分解すると、「人／＼しのばざらめ／や」となる。

「しのば」はバ行四段活用動詞「しのぶ」の未然形。古語「しのぶ」には「慕う・懐かしく思う」を意味する「偲ぶ」と①我慢する②隠すを意味する「忍ぶ」の二つがあるが、ここでは「人を」という目的語が明示されているので、「偲ぶ」＝「懐かしく思う」の方とする。「ざら」は打消の助動詞「ず」の未然形、「め」は助動詞「む」の已然形で推量の意。イの解説で扱った「か」「かは」と同様に、「や」「やは」も疑問・反語の意味をもつ係助詞。「めや」の連語表現は必ず反語を表すので、この段階で解答は定まるが、この知識をもたない受験生も多いだろう。その場合、和歌の主題を考えて「や」の意味を判断する必要がある。

傍線部オが含まれる「ながめする」の和歌は源氏が贈った「かきたれて」の和歌に対する玉鬘の返歌である。「かきたれて」の和歌が「人をいかにしのぶや」という問いかけで結ばれている以上、返歌はこれに対する返答となっているはずである。したがって、「この」や「は」は反語の意味でとり、「人」のことを懐かしまないことがあるのか、いや、懐かしく思う」と訳す。「人」は「ここでは明らかに人一般のことではなく源氏のことを指すので、「あなた」と訳す。

解答にはかかわらないが、有益なので「ながめする」の和歌全体の解釈を簡単にしておく。「ながめ」は「もの思い」の意を表す名詞「眺め」と「長雨」の掛詞。古文で「袖を濡らす」というのは、涙を流すことである。これらの表現を用い、上の句では、鬚黒大将のもとで「もの思いにふけり、涙を流す」玉鬘の状況が語られ、かつて父娘として親しく交わっていた源氏のことを「懐かしく思う」という下の句へとつながる。表現技巧に関していえば、二つの掛詞だけでなく、「ながめ」「しづく」「ぬれて」「うたかた」が縁語と

なっていることにも気づきたい。

(二)

解答 玉鬘の、もう源氏と会えないであろうことを悲しむ気持ち。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 主語特定十内容説明

解説

「誰の」「どのような」の二点を漏れなく解答しよう。

まず傍線部の逐語訳を行い、わかる範囲で「誰の」「どのような」気持ちであるかを明らかにする。その次に、必要に応じて前後の内容を参照しつつ詳細に解答を考えていく。

まずは傍線部の逐語訳を考えよう。「げに」は「なるほど・もともとだ」などと訳す副詞で、納得・同調する意を表す。「ここで」「げに」＝「なるほど」「が受けるのは直前の源氏の手紙、特に「いかでかは聞こゆはべらむ」と玉鬘とむつまじくすることの難しさを述べる箇所である。「いかでかは」は傍線部イにも出てきた表現で、副詞「いかで」に反語の係助詞「かは」がついたものと考えれば解釈しやすい。「む」は三人称主語なので推量の意。よって「げに、いかでかは対面もあらむ」は「なるほど、どうして対面もあるだろうか、いや、ないだろう」と訳せる。「対面」が難しい相手は、「げに」の受ける内容より「光源氏」。また、「対面」が難しい理由が、「わが心にもく親にて」と玉鬘視点の源氏描写として語られていることから、傍線部が玉鬘の心情であることもわかる。「あはれなり」は最重要単語で、「①しみじみと趣深い②気の毒だ③ありがたい」などの意味がある。訳語を逐一覚えるより、「しみじみとした心の動きを表す」という部分を核に、文脈に応じてふさわしい訳語を考えるのがよい。確認した通り傍線部は玉鬘の心情を述べたもの

なので、これは源氏との「対面」ができない自分の身を「悲しむ」気持ちである。「ここまでの内容を踏まえると、傍線部の逐語訳は「なるほど、どうして(源氏との)対面があるだろうか、いや、ないだろうと悲しい」となる。これを設問の要求する形に書き改めると、解答のようになる。

(三)

解答

右近が、玉鬘と光源氏の関係について、理解しがたいと疑問に思っている。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 主語特定＋内容説明

解説

まずは傍線部の訳。「いか」は漢字をあてると「如何」。「いかなり」はそれほど頻繁に出てくる表現ではないが、「どのようである」と訳出することはできるだろう。以降は品詞分解すると、過去の助動詞「けり」の連体形＋名詞「こと」＋断定の助動詞「なり」の未然形＋推量の助動詞「む」の終止形となり、全体では「どのようであったことなのだろうか」と訳せる。

あとは、「誰が」「何について」傍線部エのように思っているのかを考えていく。傍線部ウに続き、この場面にいるのは、玉鬘と右近の二人。

(二)の解説でも確認した通り、第2段落第2文「時々々思しつづくれど」は源氏からの手紙を読んだ玉鬘の心情描写である。「時々々思ひきこえしなどは」は前書きにある「光源氏にも思慕の情を寄せられ困惑」していたかつての玉鬘と源氏の間のことという。過去の助動詞「き」の連体形「し」も、過去のものとなってしまった光源氏との関係について言っているのだと判断するヒントになる。

「この人にもく気色見けり」もまた難解である。「この人」って誰? と思

うかもしれないが、とりあえず読み進める。玉鬘は「この人」に知らせなかったので、自分一人で考え続けていたが、「右近」は様子を察していたようだ、という流れから、「この人」＝「右近」だと推測したいところ。

ここまで読めれば、傍線部エのように「心得がたく」思っているのは、玉鬘から、光源氏との関係について知らされていない右近だとわかる。以上をまとめる。

(四)

解答

《合格答案》

玉鬘が、光源氏への手紙の返事を丁寧に書いた。

《満点答案》

玉鬘が、光源氏への手紙の返事をあえて礼儀正しく丁寧に書いた。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 主語特定＋内容説明

解説

傍線部を品詞分解すると「みやみやしく書き／なし／たまへり」となる。

傍線部力の直前「ながめするくあなかしこ」は玉鬘から光源氏への返事なので、「書きなし」たのはもちろん玉鬘。尊敬語「たまふ」が用いられているので、右近による代筆の可能性を検討する必要もない。「なし」は「わざとくする」などと訳す補助動詞「なす」の連用形。ここまでで、傍線部は「玉鬘は源氏への手紙をわざと『みやみやしく書いた』と訳せる。

「みやみやし」は「礼儀正しい・恭しい」を意味する形容詞。よって解答は「玉鬘が、光源氏への手紙の返事をあえて礼儀正しく丁寧に書いた」となる。しかし、「みやみやし」の意味を簡単に答えられる受験生はごく少数だ

ったのではないだろうか。「あやめやし」には現代語でも用いられる「うやうやし」という同義語があるので、音の類似から意味を類推することができればよいのだが、そうはいってもなかなか難しい。わからないのであれば、玉鬘がどのように手紙を書いたのか、本文の記述から推測するしかない。手紙の描写④手紙を受け取った源氏の反応の四つである。このうち、③④は今明らかに役に立たないので、手紙の内容と表現に注目する。

和歌も含めた手紙の内容は、「玉鬘が光源氏を慕い続けており、傍にいられなくて退屈だ」というもの。ここから考えられる玉鬘の手紙の特徴は、いじらしい、健気である、といったところだろう。ここから「あやめやし」の正しい意味を連想するのはまず不可能である。

手紙の表現から「あやめやし」の意味を推測する場合、目にとまるのは結びの「あなかしこ」だろう。「あなかしこ」は感動詞「あな」と形容詞「かしこ」の語幹からなる表現で、ここでは手紙の文末に書き添えて敬意を表す用法である。古文中、手紙の文末に「あなかしこ」が使われているのは見慣れないなあ、とでも考えることができれば、「あやめやし」の意味にたどり着いたかもしれない。

(五)

解答

《合格答案》

女性に恋をして、心を悩ませているような人。

《満点答案》

障害があっても相手の女性に強く想いを寄せ続ける好色な人。

難易度 ★★☆☆★

設問パターン 内容説明

解説

難問である。傍線部の逐語訳ができたところで、解答欄は大きく余る。どうしても補えそうな内容を、少しでも本文に即して考える、というところに実力が発揮される。

傍線部を品詞分解すると「好い／たる人」となる。「好い」は「好く」の連用形イ音便、「たる」は存続の助動詞「たり」の連用形。「好く」には「①好色である②風流を好む」の二つの意味があるが、本文、特に第3段落で話題になっているのは(源氏の)恋愛である。①の意味でとり、「好色である人」と訳す。ここまでは難しくない。

次に、本文の内容をもとに、「好色である人」の内容を充実させる。「好いたる人」の表現が念頭に置く人物は源氏自身である。ほかに手がかりがない以上、「好いたる人」の「ここで」の意味を明らかにするには、①源氏の恋愛経験等に関する記述を本文から抜き出し②その内容を抽象化してまとめ、という手順を踏めばよい。

源氏の恋愛模様に関しては、「玉鬘」との関係、「尚侍の君」||「朧月夜」との関係の二つが語られる。後者は「ひきひろげて胸に満つ心地して」(第3段落第1文前半)、すなわち「玉鬘の手紙を受け取り、胸がいっぱいになるような気持ちが出て」思い出した経験である以上、その内容は回想を引き起こした玉鬘との現在の関係に類似しているはずである。両者に共通する要素として読み取れるのは「源氏が想いを遂げることが妨げる何かがある」とである。前書き第2行「光源氏の娘として引き取られ」、第3行「鬚黒大将の妻となつて」とある通り、玉鬘は源氏の「義理の娘」にして「人妻」である。たやすく想いを成就できるような関係にはない。尚侍の君についても、「注」に「弘徽殿太后が強引に源氏と逢えないようになさつた」とはつきり

書いてある。

さらに、「玉鬘のいじらしい返答」「ながめする」の和歌) を読んで「胸に満つ心地」し、「御琴掻き鳴らして〜思ひ出でられたまふ」(第3段落第2文後半)源氏の描写には、困難な状況にあっても玉鬘への思慕の情を捨ててはいないことが表れている。「胸に満つ心地して」思ひ出した尚侍の君との思いにについても、事情は同様のはずである。

以上を踏まえると、本文で語られる源氏の恋愛のあり方は①結ばれるのが困難な状況・相手であっても②あきらめることなく思慕し続ける態度、とまとめることができる。そのような人物であれば、源氏が考える通り「心からやすかるまじきわざ」(第3段落第3行) Ⅱ「自分の心ゆえに、穏やかな気持ちではいられないこと」であってもおかしくない。「こ」で、「源氏は本文で語られるだけでもすでに二つの恋愛に出している、これは③いろいろな女性に手を出す、という第三の要素」……と考える必要はない。「好いたる人」 Ⅱ「好色な人」の時点で、③の内容は含意されている。

解答をまとめる際には、「好色な人物」という形で、①②の内容が含まれる表現を工夫する必要がある。

また、実際に解答を考えるうえで、光源氏の人物像から「好いたる人」をイメージするのも有効だ。光源氏は、父親の再婚相手や政敵の娘などを相手に、多くの道ならぬ恋に走った人物だ。そしてその度に思い悩む様子が、「心からやすかるまじきわざなりけり」に表れている、とみることもできる。

本文解説

現代語訳

二月になった。大殿(Ⅱ光源氏)は、「それにしても薄情な仕打ちだなあ、

なんとこのようにはっきり(鬚黒が玉鬘を連れて行ってしまふ)とは少しも思わず、油断させられた悔しさと「いったらない」と、みっともなく、まったくお氣になさらないときはなく、恋しく思い起こされなさる。運命などというものは、並一通りではないものであるけれど、自分のありあまる気持ちで、このようにどうしようもないものを思うのだよと寝ても覚めても(玉鬘の)幻影が浮かびなさる。大将のように、風情も愛想もない人に(玉鬘が)連れ添っているようなときには、(光源氏は)ちょっとした冗談も遠慮されつもらなく思われなさって、我慢していらっしやるが、雨がひどく降ってとても落ち着いた頃、このような退屈さも紛らわすために立ち寄っていた場所に行きなさって、お話しになったことなどが、たいそう恋しいので、お手紙を差し上げなさる。(光源氏は)右近のもとにこっそりと差し出すが、一方では右近が(不審に)思うであろうことを考えなさると、何事も書き続けなさることもできず、ただ相手(Ⅱ玉鬘)の推察に任せた書きぶりなのであった。

「かきたれて……(雨が降り続く)のかな春雨の頃旧居の私をどのように思い起こしていらっしやるか) 退屈さに加えて、恨めしく思い出されることが多くございしますが、どうして申し上げることができるだろうか、いや、できない」などである。

鬚黒が不在の折にこっそりと見せ申し上げると、(玉鬘は)少し泣いて、自らの心でも、時がたつにつれて、思ひ出なさる様子、直接に、「恋しいなあ、何とかして御目にかかりたい」などは、仰ることのできない親なので、本当に、どうしてお会いすることができようか、いや、できないと、しみじみもの悲しい。ときどきわざらわしかった様子(Ⅱ光源氏から玉鬘への愛情表現)を、(玉鬘が)不愉快に思い申し上げたことなどは、この人(Ⅱ右近)にも知らせなさらないことなので、自分一人の心の中で思い続けていらっしやるが、右近は、かすかに様子を察していた。どのようであった

ことなのだろうか、今でも納得しがたく思っていた。「返事は、「差し上げるのもきまりが悪いが、(書かなくては)気がかりに思われなさるだろうか」と思っ、書きなさる。

「ながめする……(長雨が続く中、物思いにふける軒の雫に袖を濡らして泡がはかなく消えるような少しの間もあなたを懐かしまないことがあろうか、いや、懐かしく思う)」

時間がたつ頃は、本当に、格別の退屈さも募りますことよ。恐れ多く存じます」と、ことさら礼儀正しく書きなされた。

(光源氏は手紙を) 広げて、雨だれの雫がこぼれるように(涙が出そうだと)お思いにならずにはいられないが、「人が見れば、情けないことだろう」と平然と振る舞いなさるけれど、胸がいっぱいになる気がして、あの昔の、当時の尚侍の君であった朧月夜を、朱雀院の母后である弘徽殿太后が強引に光源氏に逢えないようになされたときのことなどを思い起こしなさるけれど、直近のことだからであろうか、こちらは並々ならずしみじみと心に深く感じられるのであった。「色好みの人は、自分の心ゆえ穏やかな気持ちではいがたいことなのだなあ。今となっては何につけて心を乱そうか、似つかわしくない恋の相手であることよ」と、気を静めかねなされて、お琴をかき鳴らして、ことさら好ましく弾きなされた(玉鬘の)爪音を、自然と思ひ起こしなさる。

用語解説

つれなし ①薄情だ②さりげない③平気だ

わざ ①行い②仕事③仏事

人わるし みつともない、体裁が悪い

おろかなり ①いい加減だ・並一通りだ②

をかし ①風情がある・趣がある②美しい③面白い

はかなし ①頼りない②つまらない③ちょっとした

つつまし 気おくれする・遠慮される

あいなし ①つまらない②気にくわない

ねんず **【念ず】** 「自ざ上二」 ①我慢する②祈禱する

いたし ①ひどい②激しい

つれづれ 退屈さ

・「①退屈だ②さびしい」を意味する形容動詞「つれづれなり」の語幹。

いみじ はなはだしい、ひどい、すばらしい

かつは 一方では

しのぶ **【忍ぶ】** 「自バ四」 ①我慢する②人目を避ける

【惚ぶ】 「他バ四」 ①思い起こす②恋い慕う

まほなり 完全である

げに ①なるほど②本当に

あはれなり ①しみじみと趣深い②気の毒だ③いとしい

こころづきなし 気に食わない

けしき **【気色】** ①様子②表情③機嫌

はづかし ①気が引ける②立派だ

おぼつかなし ①はっきりしない②気がかりだ・待ち遠しい

ながむ **【眺む】** 「自マ下二」もの思いにふける

あなかしこ (手紙の末尾に添えて) 恐れ多く存じます

・打消を伴って、「決してするな」と禁止の異を添える用法もある。

うたて 嫌で・不快で

もてなす 「他サ四」 ①振る舞う②処理する③世話をする

にげなし 似合わない・ふさわしくない

つま 配偶者（本文では恋の相手を表している）
なつかし 親しみやすい・好ましい

（松田朋佳、築島愛美、山崎恭子）

2017年度 東京大学 前期 国語

第三問 漢文(明代の寓話)

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★☆☆☆☆	20分	劉元卿 『賢奕編』からの出題。明代の著名な理学家・文学家として知られる劉元卿は、呉与弼・鄧元錫・章漢と並ぶ「江右四君子」の一人であり、後期陽明学派の重鎮である。本文は齊奄が飼い猫に立派な名前をつけようとして最終的には鼠という名前になったという滑稽話でありながら、文人の主張を通してどこか教訓めいたものが書かれた文章から出題されている。	2016年度では珍しく漢詩が出題されたが、2017年度は散文で文字数は169字と例年並み。第1段落では齊奄の猫の名前がどんどん猫からかけ離れていく話が展開され、第2段落はそれに対する東里の文人の主張、という構成で、複雑な句形や文構造などもなかったためかなり平易で読みやすい文章だったのではないだろうか。 設問ごとに見ていくと、(一)は単純な現代語訳問題で、aは比較に気づくことと「神」の訳を工夫すること、bは「須」の意味を文脈や文字の意味から推測すること、cは最上級の意味で訳すことに気をつけられよ。 (二)は四人目の客の

傾向と対策

発言を、傍線部の理由としてつながるようなかたちでまとめるだけ。(三)は句形を知っていれば必ず解ける単純な和訳問題。(四)は文人の最後の発言に注目し、要するに文人は何を言いたいのか、わかりやすくまとめることを心がけたい。設問も雑な解き方をしても大してずれた解答にはならないくらい平易なので、文章をサッと一読し、丁寧かつあまり時間をかけずに解答作成をしてすぐにほかの大問へ移るのがよいだろう。

《この解説の使い方》

本文読解

「通読」からなる。「通読」は教科書や辞書が使えない状態を想定した、試験場での読み方である。一読で内容を把握できる人がどのように本文を読んでいるかをたどり、自分の読み方を見直そう。一読しておおよその意味がつかめる人の読み(◎)、ワンランク上の読み(☆)、脳内で把握された内容(▼)を適宜載せてある。

設問解説

設問ごとに、どのように解答を導くか詳細に解説した。また、関連知識も掲載している。

本文解説

「書き下し」「現代語訳」「要旨」からなる。本文を読むのに時間がかかってしまう人は、「書き下し」を音読して漢文独特のリズムに慣れるとよい。

なお、作者名・作品名(作品名を書き下す場合を除く)のふりがなは現代仮名遣い、それ以外のふりがなは歴史的仮名遣いを用いている。

解答

- (一) a 虎よりも霊妙(である)
 b 浮雲を必要とするので、
 c 雲と名づけるほうがよい
- (二) 塀がどんな強風でも防ぐことから、塀は風よりも優れていると考えたため。
- (三) 塀はまた鼠に対してどうすることもできない。
- (四) 立派な名前をつけることにとらわれてそれ自体の本質を見失ってしまったのは愚かだ。

本文読解

通読

齊奄家に一猫を畜ひ、自ら之を奇とし、人に号して虎猫と曰ふ。

◎「奇才」という熟語があるように「奇」には素晴らしいという意味があったな。「号」は「名づける」みたいな意味だろうけど、この場合は特に人に「言いふらす」みたいな意味合いか。

▼齊奄は自分の飼った猫を素晴らしいと思って虎猫と名づけて人に言いふらしていた。

☆中国では古代から虎を神聖化していたな。その虎を名前に使った飼った猫を自慢していたのかな。

客之に説きて曰はく、「虎は誠に猛なるも、龍の神なるに如かざるなり。」

◎「不如」は「〜に及ばない」という意味だったな。

▼ある客人が言うには、「虎は勇猛だけど、神聖さでいえば龍には及ばない。」

請ふ名を更へ龍猫と曰はんことを」と。

◎更は変更の「更」だな。

▼どうか龍猫に名前を変えてください。」と。

又客之に説きて曰はく、「龍は固より神於虎也。」

◎また別の客人が来た。傍線部は「於」に注目すると比較の形か！

「固」は「そもそも」という意味だったな。

▼また別の客人が言うには、「龍はそもそも虎よりも神聖だ。」

龍天に昇るに、須浮雲、雲其れ龍より尚きか。

◎傍線部はどう読むだろうか？ 浮雲は名詞だし、「須」は再読文字じゃなくて普通の動詞だろうな。とにかく雲は龍より優れているらしい。

☆須は必須の「須」だから、必要だ、みたいな意味かな。

▼龍が天に昇るときに浮雲を必要とするし、雲は龍より優れているのではないか。

名づけて雲と曰ふに如かず」と。

◎「AハBニ如かず」の「Aハ」が抜けた形だから、Bには及ばない、つまり、Bのほうがいいってことだな。

☆「雲と名づけるには及ばない」(＝雲と名づける必要はない)という誤訳をしてしまいそうだけど、二つのものを比較してより立派なものを猫の名前に使おうとするこの文章の流れを読み取ると、より優れた雲と名づけるよう言っているってことだろうな。

▼猫を雲と名づけるのが一番いい。」と。

又客之に説きて曰はく、「雲霧天を蔽ふも、風倏ちにして之を散ず。

◎またまたほかの客人が来た。今度はどんな提案をされるのだろうか……。

▼また別の客人が言うには、「雲や霧が空を覆っても、風によって吹き散らされる。

雲固より風に敵はざるなり。

▼雲はもともと風に敵わない。

◎ここまでのパターンだと、猫を風と名づけることになりそう……。

請ふ名を更へ風と曰はんことを」と。

▼どうか猫の名を風と変えてほしい。」と。

◎ほらやっぱり！

又客之に説きて曰はく、「大風颯起するも、維だ屏ぐに牆を以てせば、斯ち蔽ふに足れり。

◎また客人が来た！ 「注」より「颯起」|| 「風が猛威をふるうこと」

「牆」|| 「屏」。

▼また別の客人が言うには、「強風も屏さえあれば十分に防げる。

風其れ牆を如何せん。

◎「如何せん」は反語形で「どうしようか、いや、どうしようもない」

という意味だったな。

▼風では屏に敵わない、どうしようもない。

之に名づけて牆猫と曰はば可なり」と。

▼(風より屏が優れているから) 屏猫と名づけるのがよい。」と。

又客之に説きて曰はく、「維れ牆固なりと雖も、維れ鼠之に穴たば、牆斯ち圯る。

◎まだ客人が来るのか……。 「注」より「圯」|| 「くずれること」。

▼また別の客人が言うには、「いくら屏が固くても鼠が穴をあけたら崩れる。

。牆又鼠を如何せん。

▼屏は鼠にどうしようもない。

◎鼠が猫の名前に使われるのかな。

即ち名づけて鼠猫と曰はば可なり」と。

▼鼠猫と名づければよい。」と。

◎予想通り鼠猫って名づけたね。でも何かすごい違和感……。

東里の丈人之を嗤ひて曰はく、「噫、鼠を捕ふる者は故より猫なり。猫は即ち猫なるのみ。

◎「注」より、「東里」は地名、「丈人」は老人の尊称、「嗤」は嘲笑すること。

▼東里に住む老人はこの話を聞き、笑って言うことには、「鼠を捕らえるのはそもそも猫じゃないか！ 猫は猫でしかないよね！

◎正論すぎる……。

胡為ぞ自ら本真を失はんや」と。

◎「胡為」は疑問か反語の句形をつくるが、語尾が「ンヤ」なので反語形。
 ▼どうして自ら存在の本質を失おうとするのか、いや、失うべきでない。「と。

設問解説

(一)

解答

- a 虎よりも靈妙（である）
- b 浮雲を必要とするので、
- c 雲と名づけるほうがよい

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 現代語訳

解説

a

送り仮名はまったくないが、「A_レニ於B_ニ」が「AハBヨリ（モ）_レ」と書き下し、「AはBよりも_レ」という意味の比較の句形であることに気づけばよい。

傍線部は「虎よりも神（なり）」と書き下せるが、「虎よりも神である」では日本語としてぎこちないので、人知を超えて素晴らしいという意味の神妙・靈妙といった言葉を使うとよい。

b

「須」の文字を見て再読文字だと思った人もいるかもしれないが、傍線部をよく見ると、浮雲が名詞であるから、再読文字ではなく、漢文基本文型の「 \vee （動詞）ニO（目的語）_ニ」の形である。

そして、傍線部直前を見ると、どうやら浮雲は龍が天に昇るときに使うものらしい。このことと、須は必須の須であることから、「必要とする」という意味の動詞であることがわかる。

c

比較の句形、
 $A_{レ}ハB_{レ}ニ$ 比較の句形、
 $A_{レ}不レ如レB_{レ}ニ$ AはBに及ばない（A \wedge B）
 から「Aハ」を除いた句形は一般的に「Bが一番よい」という最上級の意味になる。

ただ、ここではA \parallel 龍とB \parallel 雲の比較関係があり、Bの比較対象であるAが省略されているだけだと解釈すると、単純な比較形として「Bのほうがよい」と訳すこともできるので、どちらで解釈してもよい。

そして、「名づけて雲と曰ふ」という部分は、簡単に「雲と名づける」と訳しても大丈夫だろう。

(二)

解答 塀がどんな強風でも防ぐことから、塀は風よりも優れていると考えたため。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 理由説明

解説

傍線部を訳すと、「塀猫と名づけるのがよいだろう」。そしてその理由が述べられているのは、四人目の客の発言部分以外にないだろう。

発言部分を見返し、まずこの客は風と塀を比較したうえで傍線部の発言に至っていることをおさえない。ここまでの文脈から、虎から龍、龍から雲、

雲から風、風から塀と猫の名前が変遷していることがわかるが、四人目の客が風と塀を比較していることから、本問では純粋に風から塀へと名前を変えた理由のみ言及すればよい。

そして次の客は、どんな強風でも塀さえあれば防げる、風には塀をどうすることもできない、ということを行っている。

しかし、塀が風を防げるから塀と名づけた、というのは論理が飛躍している。塀が強風を防げることがなぜ猫を塀と名づけることになるのか。

そこで、「ここまでの客がより優れたものにあやかっただけで猫の名前をつけさせていることをおさえない。つまり、風が塀よりも優れているということが傍線部の直接の理由になる。

整理すると、

① どんな強風でも塀は防ぐことができるから

② 塀は風よりも優れているから

「傍線部」(いま風と名づけられている)猫に塀と名づける(ほう)がよいと客は言った、というようにつながる。

(三)

解答 塀はまた鼠に対してどうすることもできない。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 現代語訳

解説

如^ラ何^{イカ}何^ニセン^カ Aヲ如何^{いかに}セン^か という句形は、

疑問の意味だと「Aをどうするか・どうすればよいか」、反語の意味だと「Aを(どうすればよいか、いや、)どうしようもない」と訳せる。

試しに傍線部を疑問の意味で訳してみると、「塀は鼠に対してどうすればよいか」と疑問を残したままになり、直後の「だから鼠猫と名づけるのがよい」という主張につながらない。

反語で訳すと、塀は鼠に対してどうすることもできない、どうあがいたって塀は鼠に敵わない、といった意味合いになり、だからこそ塀よりも優れた鼠を猫の名前とすべきだ、という主張につながるのでこちらが適切。

(四)

解答 立派な名前をつけることにとらわれてそれ自体の本質を見失ってしまふのは愚かだ。

まうのは愚かだ。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明

解説

東里の丈人の発言部分を訳すと、

「ああ、鼠を捕らえるのは猫であるのに。猫は猫でしかない。どうして自らその本質を失おうとするのか、いや、失うべきでない。」

最後の一文「胡^{なんすれ}為^なぞ自ら本真を失はんや」は語尾が「んや」となっていることから反語であり、丈人の強い主張が表れている。

自分の猫を溺愛する齊奄が猫に立派な名前をつけようとして、客人のアドバイスを受けながらより優れたものから名前を取ってつけていくと、最終的に鼠という名前になった。しかし、猫は本質的に鼠を捕らえるものであるし、猫は結局のところ猫でしかない。立派な名前をつけることにはかりとらわれてその本質を見失ってはいけない、ということ丈人は強く主張しているのだ。

さらに「嗤^{わら}ふ」には嘲笑するというニュアンスがあり、齊奄の猫の話の聞

いた丈人は「ばかげている」「愚かだ」と感じたことがわかる。解答に必須のポイントではないが、丈人の主張をわかりやすく説明するうえで含めたい要素ではある。

丈人の主張を整理すると、

- ① 齊奄や客人は猫に立派な名前をつけることに執着しすぎている
- そのせいで猫とは異なるもの（しかも、あろうことか猫が捕食する鼠の）名前をつけることになり、
- ② 猫そのものの本質を見失っている。
- そしてそれは
- ③ とても愚かなことである。

そしてこのことは猫に限らないことであるとして一般化して解答をまとめよう。

本文解説

第1段落 齊奄の飼い猫の名前の変遷

書き下し

齊奄家に一猫を畜ひ、自ら之を奇とし、人に号して虎猫と曰ふ。客之に説きて曰はく、「虎は誠に猛なるも、龍の神なるに如かざるなり。請ふ名を更へ龍猫と曰はんことを」と。又客之に説きて曰はく、「龍は固より虎よりも神なり。龍天に昇るに浮雲を須むれば、雲其れ龍より尚きか。名つけて雲と曰ふに如かず」と。又客之に説きて曰はく、「雲天を蔽ふも、風倏ちにして之を散ず。雲固より風に敵はざるなり。請ふ名を更へ風と曰はんことを」と。又客之に説きて曰はく、「大風颯起するも、帷だ屏ぐに牆を以てせば、斯ち蔽ふに足れり。風其れ牆を如

何せん。之に名つけて牆猫と曰はば可なり」と。又客之に説きて曰はく、「帷れ牆固なりと雖も、帷れ鼠之に穴たば、牆斯ち圯る。牆又鼠を如何せん。即ち名つけて鼠猫と曰はば可なり」と。

現代語訳

齊奄は家で一匹の猫を飼っていて、自らこの猫を素晴らしいと思い、虎猫と名づけて人に言いふらした。ある客人が齊奄に説いて言うことには、「虎は本当に勇猛だが、龍の靈妙さには及ばない。どうか(猫の)名前を変えて龍猫と呼んでください」と。またある客人が齊奄に説いて言うことには、「龍はそもそも虎よりも靈妙な存在である。龍は天に昇るときに浮雲を必要とするので、雲は龍よりも優れているのではないだろうか。(猫を)雲と名づけて呼ぶのが一番よい」と。また別の客人が齊奄に説いて言うことには、「雲や霧は天空を覆うけれど、風はたちまちこれを散らばせてしまふ。雲はもともと風に敵わないのである。どうか(猫の)名を変えて風と呼んでください」と。また別の客人が齊奄に説いて言うことには、「強風が猛威をふるっても、ただ塀で防ぎさえすれば風をふさぐのに十分である。風それ自体は塀に対してどうすることができるといふのか、いや、どうしようもない。猫に塀猫と名づけるのがよいだろう」と。また別の客人が齊奄に説いて言うことには、「塀は固いけれど、鼠がこれに穴をあければ塀はただちに崩れる。塀はまた鼠に対してどうすることができるといふのか、いや、どうしようもない。それならば鼠猫と名づけるのがよいだろう」と。

第2段落 東里の丈人の嘲笑

書き下し

東里の丈人之を嗤ひて曰はく、「噫嘻、鼠を捕ふる者は故より猫なり。猫は即ち猫なるのみ。胡為ぞ自ら本真を失はんや」と。

現代語訳

東里のご老人がこのことに対して嘲笑して言うことには、「ああ、鼠を捕まえるのはそもそも猫である。猫はほかでもない猫である。どうして自らその本質性を失おうとするのか、いや、失おうとすべきではない」と。

要旨

齊奄が飼い猫に立派な名前をつけようと最初は虎猫と呼んでいたが、客人の助言を受けながら、虎より龍が靈妙だから龍猫、龍が空を昇る際に浮雲が必要なことから雲猫、風が雲を吹き飛ばしてしまうことから風猫、風を防げる塀がより優れているから塀猫、と名を変え続け、塀に穴をあける鼠には敵わないからと最後は鼠猫という名になった。これを聞いた東里の丈人は、立派な名にこだわってそのものの本質を見失うのは愚かだと嘲笑した。(200字)

(関信成、上野仁士朗、竹本有輝)

2017年度 東京大学 前期 国語

第四問 随筆

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★★☆	40分	幸田文『藤』からの出題。幸田文は日本の随筆家・小説家で、擬古典主義の代表的作家である幸田露伴の次女。代表作には『流れる』『おとうと』といった長編小説があるが、幸田露伴の死後に父との思い出と父を看取るまでを書いた『父 その死』『こんなこと』(のちにまとめて『父・こんなこと』)という題で新潮文庫にて出版される)といった随筆集も書いている。	2016年と比べると文学的要素が減り、まだ親しみのもてる日常的な内容だっただけに安心した受験生も多いのではないだろうか。2015年と文章の雰囲気は似ているが、2015年よりも傍線部の単語の抽象度が高くなく、2015年以降の三年間では最も取り組みやすい出題と感じた人もいたと思う。しかし大きく失点するリスクが比較的低いというだけで、限られた時間内に過不足のない答案を書き上げるのは難しく、差をつけられないよう失点を最小限に抑える必要があった。特に(一)は短い範囲の要約であったため点の取りこぼしは防ぎたいところだ。

解答

- (一) 筆者の父が各自に木を与え、手入れに責任をもたせる一方花や実を好きに扱わせたり、葉から木の種類をあてる遊びをさせたりして、自然に関心をもつよう配慮したということ。(80字)
- (二) 筆者が、地頭よきに加えて教え甲斐も学びへの意欲も姉に劣るがために、父の教える発展的な内容にも父と姉の親密さにもついていけず劣等感と疎外感を味わうこと。(76字)
- (三) 出来のよい姉への劣等感に苛まれずに姉の存命中より感覚的な内容を学びながら、花の美しさや生命力を五感で体感してふつうの遊びでは味わえない感動や興奮を実感できるから。(81字)
- (四) 陽と藤と虻と池だけで構成された空間で父と二人、視覚に加えて聴覚と嗅覚でも藤を堪能するという状況は、美への陶醉と父を独占した満足感の混じった至福の時間だったと思った。(82字)

本文解説

用語解説

― 出典：『広辞苑 第六版』(岩波書店) (ただし、※のついた語義は解説執筆者による)

植溜 ※植木屋が木を仮植えし、保管しておく農地。

施肥 肥料をほどこすこと。

羽状複葉 ※複数の小葉を持つ葉の形態のうち、それが葉軸の左右に羽状に

並んでいるものこと。

気がさす 心にひっかかることがあって、素通りできない。うしろめたい感じになる。

早世 世を早く去ること。早死に。

うら淋しさ なんとなくさびしいさま。

川べり 川のふち。川岸。

花房 房のようになって咲く花。

藤棚 ふじだな 藤づるを生えのぼらせ、花が垂れ咲くようにつくった棚。

土橋 表面に土をおおいかけた橋。

設問解説

(一)

解答 筆者の父が各自に木を与え、手入れに責任をもたせる一方花や実を好

きに扱わせたり、葉から木の種類をあてる遊びをさせたりして、自然に関心をもつよう配慮したということ。(80字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 第2・第3段落

解説

傍線部は実に簡素な表現で、指示語も含まれていない。まずは筆者の両親がやいた「世話」の内容を本文の記述と照らし合わせて具体化しようとするのが一般的ではないだろうか。傍線部の手前から引用すると「私のうちではもう少しよけいに自然と親しむように、親が世話をやいた」とあり、要するに筆者の親が、ただでさえ自然に親しみやすい土地柄であるのにさらに自然に関心をもつように仕向けたということが読み取れる。答案にはこのことを具体化して書けばよい。どのように世話をやいたのかは傍線部の次の文から詳述されている。

第2段落では木を与えるという具体例について、権利と義務に分けて述べ

ている。

まずは2文目「私は三人きょうだいが」から5文目「持主は花も実も自由にしているのだが」まで、おもに父から子供たちに与えられた権利について説明している。端的にまとめると「木およびその花や実の所有権を子供に与える」というものである。第2段落5文目の「持主は花も実も自由にしている」の「いい」がやや口語的だと感じたので、解答では「花や実を好きに扱わせる」と言い換えた。そのままでも誤りではないのだが、このほか「花や実の処分を任せる」「花や実の処遇を託す」といった、「自由にしている」を明確化した表現を用いるとよりよい答案になるのではないかと思う。

ちなみに花や実の木は木の付随物であるのだから、「各自に花や実なる木を与えたり」と書くだけでこの部分への言及を済ませても構わないのではないかと思つた受験生もいるだろうが、第2段落の最終文では「花の木実の木と、子供の好くように配慮して、関心をもたせるようにしたのだと思う」と総括されており、筆者は父がわざわざ蜜柑や柿、桜といった、その木になる花や実で楽しむことのできる木を選んだのだと考えている。よって楽しい側面を強調する必要があると読み取り、字数制限が厳しいながらも解答では「花や実を好きに扱わせる」という部分は削っていない。

義務については5文目の「その代り害虫を」以降で説明されている。花や実を自由に処分する対価として筆者の父が言いつけたのが、「害虫を注意すること、施肥をしてもらうとき、植木屋さんに礼をいっておじぎをする」と等々(第2段落5文目)である。害虫を注意することはもちろん木の世話をするこの範疇であるが、植木屋さんにおじぎをするというのは一見礼儀をしつけることで、木の世話とは関連がないようにみえるかもしれない。しかし、これも自分だけでは力の及ばない部分を植木屋さんに外注したならばそれに対して感謝の念を示すべきだという意味で、木の持ち主としての責

務を果たすことの一環だと解釈すると、子供たちに与えられた義務は「責任をもって木の世話をする」と要約できる。

次に第3段落にうつり、解答に盛り込む二つ目の具体例である「あてっこ」という遊びについて説明する。そもそもこの部分を解答に含める理由についてだが、1文目の「父はまた、木の葉のあてっこをさせた」が根拠である。この「また」こそが、前文(第2段落最終文)にあるように「子供の好くように配慮して、関心をもたせる」ために子育てに取り入れたことの一つとしてあてっこが並列されていることを示している。しかし、「彼は野球選手で、また実業家でもある。」というように「また」には物事をつけ加える働きもあるため、この「また」を並列でなく添加だと受け取った場合についても考えてみることにする。このとき、文脈としては「父は子供たちに木を与えて世話をさせた。さらに、あてっこという遊びもさせた。」となり、木の世話を通じて植物に愛着が湧いてきたところで植物の種類を覚えさせるといような、体系だった教育法と解釈できる。この観点においても木の世話とあてっこがひとまとめで「もう少しよけいに自然と親しむ」ための父の配慮であることに違いはないので、どちらにせよあてっこは本問の答案に取り込むべき要素だといえる。

あてっこの説明は3文目までで終わっており、そこから先は筆者の姉に対する劣等感の話へと移ってしまうので、木の世話の例と比べてかなり簡潔な説明で構わない。2・3文目をまとめるとあてっことは「木の葉を見せてどの木の葉か当てさせるゲーム」だとわかる。ここでも筆者の父が子供の楽しむことに重点をおいていることを強調すべく、解答では「葉から木の種類を当てさせる遊びをしたり」とした。

しかし、この二つの具体例を並列するだけでは「世話をやいた」の完全な言い換えにはならない。「木を与えたり、木の葉の種類を当てさせたり」す

ることで、どのような効果が期待されるものなのか。第2段落の最終文で筆者が父の木を与えた狙いについて「子供の好くように配慮して、関心をもたせるようにした」という推察を述べている箇所を解答のベースにしたところである。しかもここは傍線部直前の「もう少しよけいに自然と親しむように、世話をやいた」と同じような内容・構成になっており、言い換え表現だと考えられる。よって「世話をやく」は「関心をもたせるようにする」とことと解釈するのが、最も本文に忠実な考え方だといえる。

素直で確実な答え方はこのようなものであるが、もう少し本文を自分なりに解釈して発展させる場合の一例も挙げておきたい。木の世話・あてっこの二つを通して筆者ら姉弟は日常的に自然にふれる習慣があったことを根拠に、この解答の主語は父であることも考慮して、「自然にかかわる習慣をもたせた」「生活に自然にふれる機会を取り込んだ」などと言い換えるのも妥当なまとめ方の一つであるだろう。

《解答要素》

- ① 筆者の父が各自に木を与え
- ② 花や実を好きに扱わせる一方手入れに責任をもたせたり、
- ③ 葉から木の種類をあてる遊びをさせたりして
- ④ 自然に関心をもつよう配慮した

※解答は「〜こと。」と締めくくると

《参照箇所》

- ① 第2段落2文目
- ② 第2段落5文目
- ③ 第3段落1〜3文目
- ④ 第2段落6文目

(二)

解答

筆者が、地頭のよさに加えて教え甲斐も学びへの意欲も姉に劣るがために、父の教える発展的な内容にも父と姉の親密さにもついていけない。劣等感と疎外感を味わうこと。(76字)

難易度 ★★☆☆

設問パターン 要約型十具体化型

解答範囲 第3・第4段落

解説

(一)に続き傍線部は非常にシンプルな表現であり、この設問で求められているのは「嫉妬」の具体化と「淋しさ」の具体化だけである。第4段落6文目に「ねたましさ」という「嫉妬」と同義の単語があり、5・6文目でその嫉妬の原因となるような姉と筆者との二項対立がなされているが、そのまま列挙するには解答欄は狭いので簡潔にまとめたい。まず一点目、「うまれつき聡いという恵まれた素質をもつ」姉に対して「鈍いという負目をもつ」筆者はどう劣っているのかというと、生まれ持った頭のよさ、すなわち「地頭のよさ」といえるだろう。同様に二点目、姉は「教える人を喜ばせ」るのに対して筆者は「教える人をなげかせ」てしまう。教える側の士気を上げるか下げるかという問題であり、最も端的な言い方としては「教え甲斐」が挙げられるのではないだろうか。最後に三点目、「自分もたのしく和気あいあいのうちに進歩する」姉と比べて筆者は教える側だけでなく「自分も楽しまず」に終えてしまう。この違いは学びを楽しんでいるかどうか、ということであり、すなわちこれは学びへの態度が前向きであるか否かと言い換えられる。この二項対立の二文が「筆者は」ねたましさを味わう」と閉じられているため、以上の要素がその理由である。そして最後に十分気をつけてほしいのが、「一方はうまれつき聡いという恵まれた素質をもつ上」(5文目)、「一

方は鈍いという負目をもつ上」(6文目)と、地頭のよさは単なる並列ではなく前提として挙げられていることだ。これも踏まえると「嫉妬」は「地頭のよさに加え、教え甲斐も学びへの意欲も姉に劣る筆者が味わっているねたましいという気持ち」と具体化できる。

次に「淋しさ」に話を移す。第3段落の9文目に「私はいい気持ではなかった」とあるものの、その後「姉のその高慢ちぎがにくらしく、口惜しかった。しかし、どうやっても私はかなわなかった。」と書かれているため、これは「嫉妬」の描写であり「淋しさ」ではない。第4段落最終文の「気がさす」もうしろめたい気持ちがするという意味であるため、「淋しさ」に相当する直接的な表現は該当部分のどこにも見当たらない。しかし傍線部直前にあるような「姉はいつも父と連立ち、妹はいつも置去りにされ、でも仕方がないから、うしろから一人でついてい」っている筆者の気持ちを想像するならば、それは「淋しさ」ではないだろうか。生まれ持った素質として明らかに優れている姉と、その才能を喜び自分にはついていけない内容を嬉々として教える父。その二人から置いてけぼりをくらって一人とぼとぼと歩く自分。「いつも置去りにされ」というのは、実際に二人が散策に行くのに置いていかれるといった物理的な意味でも、自分には理解できない高度な内容を姉が理解し、父と二人和気あいあいと話すのを目の当たりにして感じた精神的な意味でもあり得る。

よって、「淋しさ」は具体的には「父の教える発展的な内容についていけず、父と姉の関係性からも取り残されたような気持ち」であるといえる。「取り残されたような気持ち」という言い方は直喩であるため、さらに言い換えて「姉と同時に習得できず、父との親密さにも追いつくことのできない孤独感」などと書くと、より設問者の要求に近い答案になるのではないだろうか。解答では字数的に余裕があったので、劣等感と疎外感を両方用いた。ちなみ

にここで「焦燥感」や「焦り」といった表現を使うのは、第3段落12文目(最後から2文目)の「そんなにくやしがるなら、自分もすっかり覚えればいいものを、そこが性格だろうか、どこか締りがゆるいとみえて」という描写と適合しないので避けたほうがよい。筆者の感じた「ねたましさ」や「淋しさ」は「焦り」や「対抗心」といったような筆者自身を駆り立てるものに変化することなく、姉と自分を相対化し自らの立ち位置を悲しむ感情にとどまったと思われる。

《解答要素》

- ① 筆者が、地頭よさに加えて教え甲斐も学びへの意欲も姉に劣るがために
- ② 父の教える発展的な内容にも父と姉の親密さにもついていけず
- ③ 劣等感と疎外感を味わう

※解答は「くこと。」あるいは「く疎外感。」などと締めくくると。

《参照箇所》

- ① 第4段落5・6文目
- ② 第4段落1・2文目
- ③ 第4段落3文目

(三)

解答

出来のよい姉への劣等感に苛まれずに姉の存命中より感覚的な内容を学びながら、花の美しさや生命力を五感で体感してかっつうの遊びでは味わえない感動や興奮を実感できるから。(81字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 第5～第7段落

解説

この大問で理由が問われている唯一の問題である。傍線部そのものの説明を求められているわけではないものの、問題を解くうえで傍線部の指示語「こういう指示」の内容を具体的に把握せずに傍線部の理由を説明することは難しいので、まずは指示語の把握から始めよう。その指示内容はというと、第6段落4～8文目で述べられているような、みかんの花は舐めれば甘いのだという教示や、猫やなぎなど変わった植物の名前の由来に関する問いかけのことだ。ちなみに「指示」という単語には、なじみ深いであろう「指図すること」という意味だけでなく、「物事を指し示すこと」という意味もあるのだが、そうと知らずに後者に分類される4・5文目を指示内容から外してしまった人もいたかもしれない。そういう人にはこれを機にぜひ覚えておいてほしい。

そして第7段落の傍線部のあとで例として出ている大根の花、蜜柑の花、蓮の花は第6段落の「こういう指示」の指示内容ですでに登場した花々であることから、第7段落の2文目以降は「こういう指示」を受けて筆者がどう感じたのかを描写しているのだと考えられる。3～5文目を要約すると、花々が筆者にもたらしたのは、鬼ごっこなどのふっつうの遊びでは得られない類の感動や興奮である。「ぴたっと身に貼りつく」(3文目)を解答に書けるような言葉遣いになおすのは一苦労であるが、「息さえひそめてうっとりした」(2文目)が参考になるのではないだろうか。この二つに共通するのは全身でその美しさを楽しんでいるような表現であることで、「ここで」こういう指示」の内容を思い出す。第6段落をみるに、父は筆者に視覚だけでなく、みかんの花を嗅覚と味覚で(5文目)、蓮の花を聴覚(8文目)と触覚(12文目)で楽しむことを教えている。また、花の底に蜜が貯えられていること

(5文目)や、花卉の筋が「そっぽい触感であること」(12文目)は、植物の生き抜くためのたくましさを示唆しているようであるため、筆者が享受したものを美しさだけにとどめず「美しさや生命力」とした。体を動かすふつうの遊びと「全くちがうたち」(第7段落最終文)なのはどこかというところ、花々に触れるときには五感すべてを使うことができる点である。しかし解答欄のスペース上これら全部を書ききることはできないので、いかに少ない文字数で採点者に理解していることを伝えるか、というのがこの問題の焦点であり、解答では「五感で」で鬼ごっこなどの遊びと差別化し、「体感して」で「ぴたっと身に貼りつく」を言い換えた。

このように「こういう指示」を整理すると、感覚に訴えかけるものばかりであることに気がついただろうか。第3段落に「そんなにくやしがるなら、自分もしっかり覚えればいいものを」とあることから、姉が存命だった頃は、父について植物を学ぶ際はおもに暗記力を要することが多かったことが読み取れる。しかし、これらの感覚で植物を捉えるような試みに暗記力は必要なく、このような父の教えてくれる内容自体の変化も、筆者が「大へんおもしろい」と感じた要因の一つと考えられる。

それに加えて、傍線部をみたときに違和感を抱いてほしかったのが、(2)では学びには嫉妬や淋しさといった感情を伴っていたのに、傍線部からはかなり学びを楽しんでいるような印象を受けることだ。それでは(2)の時と比べて転機となるような出来事は何かというと、第5段落で明らかになる姉の早世である。姉がいなくなったことこそが、前述のとおり父の教えの内容が親しみやすいものになったことに加え、劣等感や孤独感を感じずにすむようになったことの直接の原因であるので、解答に盛り込むのを決して忘れないほしい。

《解答要素》

- ① 出来のよい姉への劣等感に苛まれずに
- ② 姉の存命中より感覚的な内容を学びながら
- ③ 花の美しさや生命力を五感で体感して
- ④ ふつうの遊びでは味わえない感動や興奮を実感できる

※解答は「くから。」と締めくくると。

《参照箇所》

- ① 第5段落、第6段落1・2文目
- ② 第6段落
- ③ 第6段落4～13文目、第7段落2～5文目
- ④ 第7段落3～5文目

(四)

解答

陽と藤と虻と池だけで構成された空間で父と二人、視覚に加えて聴覚と嗅覚でも藤を堪能するという状況は、美への陶醉と父を独占した満足感の混じった至福の時間だったと思った。(82字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型+指示語説明型

解答範囲 第9段落

解説

第9段落、すなわち最終段落がこの問題の根拠をおもに拾う場所であるが、8文目までは筆者と父が藤を見に行った園の様子をおよそ叙述的に説明しているだけであって、筆者が美しさを見出して余韻を持たせたような描写はない。具体的に抜き出すと、9・10文目では「花が落ちた」と二回繰り返される反復表現が用いられているうえ、このあたりから「ぼとぼと」(10文

目)、「ゆらゆらと」(11文目)といったように擬音語・擬態語が出現する。このような文体の変化から考えて、本問の解答根拠は9文目以降である。

まず9～13文目は視覚で受容するものの描写である。藤の花が落ち、それに伴って池の水紋がゆらぎ、それを陽の光が照り返す。そして虻が飛び交う。筆者は視覚でこの様子を、すなわち「陽と花と虻と水」(16文目)を受容する。次に聴覚では何を捉えるか。藤の花が落ちる音(10文目)、虻の羽根の音(14文目)である。そして15文目にある通り、嗅覚で藤の花の匂いを感じる。要するに、筆者は五感のうち視覚・聴覚・嗅覚を用いて「陽の光と藤の花と虻と池の水」を受容しているわけであるが、解答ではこの部分は文字数の都合上6文目の表現を一部変えて「陽と藤と虻と池」と省略した。

そして傍線部の直前では「誰もいなくて、陽と花と虻と水だけだった」(16文目)、「ほかに何の音もしなかった」(17文目)、「父と並んで無言で佇んでいた」(18文目)というようにその四つの要素以外に何も存在しなかったということが三文続けてやたらと強調されているため、「さだけで構成された空間」や「さのみを受容して」などといった形でそのニュアンスを答案に反映させてほしい。第9段落に書かれている藤の美しさに関する描写については以上である。

「飽和」とはどういうことか。一見したところではこのように①不純物がなく、陽の光・藤の花・虻・池の水という美しい自然の要素だけで空間が構成されている点、②視覚だけでなく聴覚と嗅覚まで用いて藤を感じている点の二つを指しているようにみえるかもしれない。しかし、②に関しては(三)を思い出してほしい。(三)で筆者は父に教えられて、文字通り五感を漏らすことなくすべて使って自然を感じていた。それに対してこの状況で用いられているのは視覚・聴覚・嗅覚の三つだけである。果たしてこれを「飽和」といってよいのかどうか。

そこで注目してほしいのが傍線部の前の文(18文目)にある「ぼんやりとどうか、うっとりというか、父と並んで無言で佇んでいた」という表現である。よく読むと17文目までは情景描写であるのに、18文目だけが筆者の状態を説明している。要するに「あまりの美しさに言葉も出ず、恍惚としていた」ということなのだが、そこに1文目で藤のある園に行くことになった経緯が説明されて以降出てこなかった父の存在がもう一度持ち出されている。正直なところ、この一フレーズから筆者の父が解答のキーポイントであることを察しろというのはかなり高度な要求だとは思う。受験テクニック的な話をするのは本意ではないが、第一問の最後の小問によく「本文全体の論旨を踏まえた上で」と付されることがあるのと同様に、実は第四問の最後の小問も本文の論旨を踏まえて書くことより要点をつかんだ答案になることがある。もし前後の内容だけで要素が足りないと感じるならば振り返って本文を見直すのも一つの手であるから、今後のために覚えておいてほしい。本問はまさにこのタイプであり、第3・4段落で述べられた父のお気に入っていた姉への劣等感、第5・6段落からうかがわれる姉の早世後の解放感を踏まえると、筆者の隣にいる父の存在の重要性に気づきやすくなるだろう。また、第9段落最終文の「ただ藤の花を見ていただけなのに、どうしてあかも魅入られたようになったのか、不思議な感じがする」という記述からは、筆者自身も「飽和」は藤のみによるものではないと推測していることが読み取れる。このように一度気づけば後付けの根拠は複数見つかるのだが、やはりこのポイントを解答に盛り込むのは至難の業といえるだろう。

よって「飽和」を構成するもう一つのポイントは③父を独占している点であり、①②はまとめて美を余すことなく享受できているという感覚的な満足感、③は筆者の幼少期の葛藤が昇華されたという心理的な満足感とまとめることができる。この①②③の要素から得られたであろう感情をまとめて、「美

に浸り、父を独占していることによる感覚的、心理的満足感の混ざり合った至福の時間」と完全な並列にすると整合のとれた見た目のよい答案になるが、文字数の都合上解答では④美への陶醉と父を独占した満足感の混じった至福の時間を「飽和」に当てはめることにした。「至福」の他にも「至高」「満ち足りた」「幸せであふれた」など、とにかくプラスの感情で満たされているのだということを示す言葉を選べばよい。

最後に文末表現について補足すると、「どう思ったのか、説明せよ」という出題のされ方なので体言止めは適切でないと考え、解答では「〜と思った。」で締めくくることにした。

余談だが、私は受験生だった頃、国語のときだけ0.3mmのシャープペンシルを使うという荒業を駆使して答案を練っていた。書くことのできる文字数が確実に増えるので文字数に悩まされる受験生には一度試してみてほしい。

《解答要素》

- ① 陽と藤と虹と池だけで構成された空間で
 - ② 視覚に加えて聴覚と嗅覚でも
 - ③ 父と二人藤を堪能するという状況は
 - ④ 美への陶醉と父を独占した満足感の混じった至福の時間だった
- ※解答は「〜と思った。」や「〜こと。」と締めくくること

《参照箇所》

- ① 第9段落9〜18文目
- ② 第9段落9〜18文目
- ③ 第9段落18文目
- ④ 第9段落

(峯岸佑奈、小島朋朗、加藤香織)